

# シャーンタラクシタの中観思想の形成と シュバグプタ、シャーキャブッディ ——自然界（原子、物質）と知識の峻別の根拠——

森 山 清 徹

## 序

bodhisattva（菩薩，覺有情）という要語から知られるように sattva（有情，衆生）とは、魂を有するものという意味であり，人間のみならず，動物や昆虫などもその範疇に入る。したがって，それとは草や木や山や川などは，魂をもたない物質として区別される。そこで後者の総称としての自然界とは物質からなるものと見るのが，インド佛教的であろうし科学的でもであろう。というのは，人間も自然界の一部であるという意味を，インド佛教に照らし合わせるならば，それは人間や動物などの肉体（物質，色 rūpa）に関してということであり，それとは魂や精神（心，心所）は区別され，また後者は物質の運動の法則や質量保存の法則に従うわけではないから，それらを区別して考えるのが科学的といえよう。

では，さらに物質とは何からなるのか。物質を考察する上で，その最小単位として原子を想定することは，ブッダとほぼ同時代の古代ギリシャの自然哲学者デモクリトス（c. 466-370B.C.）らにより行われ，これ以上分割できないもの atomos と呼ばれた。この限りでの物質の最小単位を原子とすることは（現在では電子とされるであろうが），インドでも古くから行われ，佛教外では自然哲学と呼ばれる勝論派の思想によれば，九種の実体（地，水，火，風，虚空，時間，方角，アートマン，マナス）のうち地，水，火，風は原子（paramāṇu）の集合体からなり，無常であるが，それを構成する原子はそれ以上分割できないものであり，常住である。さらに方角なども実体とされる。また佛教ではアビダルマの説一切有部，経量部などでそれぞれ固有な原子論が提唱された。それらの原子論の内容は異なるとはいえ，彼らは共通して輪廻からの解脱を目指す上から原子を考察している。他方，それらを批判的に吟味し，

心とは独立して原子からなる外界の対象は実在しないことを論じ、唯識思想を確立した論師にヴァスヴァンドゥ（世親）がいる。さらに精密な認識論と論理学を確立した論師にダルマキールティ（c. 600-660）、シャーキャブッディ（c. 660-720）らがいる。その影響下にシャーンタラクシタ（c. 725-788）、カマラシーラ（c. 740-795）らがついて、唯識思想から、さらに中観思想を展開した。また、原子論を提唱した論師にシュバグプタがいることも知られ、彼の原子論はシャーキャブッディ、シャーンタラクシタ、カマラシーラ、ハリバドラ（c. 800）らの著作の中で批判的に吟味される。すなわちシャーンタラクシタ、カマラシーラらは、他学派による自然界（物質）の構成を説明する原子論を批判的に検証し、そしてそれが自己の認識とは全く独立したものであるものとしての自然界の設立根拠となり得るものではないと論じ、自然界とは実は自己の認識を離れ独立してあるものではないとの理解（唯識思想）に至り、さらには、その自己の認識すらも究極的なものではあり得ない、という反省の上に真相の解明に従事している。これは、最先端の科学的解明の場合と同様、我々の知り得たものは暫定的な解答にしか過ぎない、ということ虚心に自ら悟ることが、最も優れた英知の一部であると、彼らは主張しているように思える。

## 目的と基礎資料

英文要旨に示した通り、世親の『唯識二十論』（Vś）に於ける三種の原子論批判を踏まえシャーキャブッディはシュバグプタの原子論を「一多の点で吟味に耐え得ないこと」を根拠に批判し、このことがシャーンタラクシタ、カマラシーラに継承されている。さらにシャーキャブッディは、有外境無形象知識論、有形象知識論を批判し唯識説へと導いている。このことが、シャーンタラクシタ、カマラシーラの、諸哲学の観察と超越の次第<sup>1)</sup>の体系化に、また離一多性を立証因とする無自性論証の確立に活用されていることを探求する。その基礎資料とする文献の一覧は次のものである。

三種の原子論を挙げ、順に批判し唯識無境へと導くものに

世親（Vasubandhu）：*Vimśatikā vijñaptimātratāsiddhiḥ*（Vś）『唯識二十論』，ed. by Sylvain Lévi, Paris, 1925

ヴィニータデーヴァ（Vinīta-deva）：*Prakaraṇavimśatikā-ṭīkā*（PVT），D.No.4065

デーヴェンドラブッディ（Devendrabuddhi）：*Pramāṇavārttikapañjikā*（PVP），

1) cf 梶山（1979）、森山（1985）。

P.No.5717, D.No.4217

シャーキャブッディ (Śākyabuddhi) : *Pramāṇavārttika-ṭīkā* (PVTŚ), P.No.5718, D.No.4220 『現量章』

シャーンタラクシタ (Śāntarakṣita) : *Tattvasamgraha* (TS) 第二十三章「外界の対象の検証」ed. by Shastri D., 1968

カマラシーラ (Kamalaśīla) : *Tattvasamgraha-ṭīkā* (TSP)

さらに三種の原子論批判, 唯識無境説から中観思想へと導くものに

シャーンタラクシタ (Śāntarakṣita) : *Madhyamakālaṅkāra* (MA), MA-vṛtti (MAV)

カマラシーラ (Kamalaśīla) : *MA-ṭīkā* (MAP), ed. by M. ICHIGO, 1985

その上, MAV, MAP を踏襲するものに

ハリバドラ (Haribhadra) : *Abhisamayālaṅkāraḥ Prajñāpāramitāvyaḥkā* (AAA), ed. by U. Wogihara, 1932, 1973

以上の文献とは異なり外界实在論に立ち原子の实在を論じ無形象知識論, 有形象知識論を提唱するものに

シュバグプタ (Śubhagupta) : *Bāhyārthasiddhikārikā* (BASK)

## I. 世親とシャーキャブッディの原子論批判

世親は Vś 11 で三種の原子論を示し, 原子は単一 (eka) 及び多 (aneka) としても対象 (viṣaya) となり得ないと批判している。すなわち, (1)勝論派の想定する単一な全体性 (avayavin) というものは, 諸部分 (avayava) とは別に全体性は認識されないという理由で否定される。(2)説一切有部が想定する原子という点で多 (aneka) なるものは, 個々の原子が認識されないのであるから, 多であることも認識されないと否定される。(3)経量部の想定する諸原子の積集したもの (saṃhata) は, 原子は一実体 (dravya) として証明されないから, それらの積集したのも対象ではあり得ないと批判される。ヴィニータデーヴァは(2)説を多くの原子が間隔を有するとし, (3)説を諸原子が間隔をもたないと注釈している<sup>2)</sup>。この世親による三種の原子論に対する批判的吟味は, シャーキャブッディによって継承されている<sup>3)</sup>。それは, ダルマキールティが, PVIII (211) で《粗大な顕現 (sthūlābhāsa) という

2) cf PVT 185b3-4, 御牧 (1972) pp.4-5

3) cf V. 資料 [1]

ものは対象にも知にも存在しない、なぜなら粗大な顕現は一においても、多においても存在しないからである》<sup>4)</sup>と表明することへのデーベンドラブッディの注釈を受け、さらにシャーキャブッディが解説する中に見い出される<sup>5)</sup>。すなわち(1)諸原子が結合する場合、Vś 12 に従って一部分で結合するなら、原子は部分を有する矛盾となり、全体で結合するなら諸原子は一原子の塊 (piṇḍa) に過ぎなくなるという矛盾を指摘する。次にシャーキャブッディは(2)説として原子は包囲されていて、間隔を有し、粗大な顕現は迷乱であるというシュバグプタの BASK 35 を想起させる見解を挙げ、さらに BASK 46<sup>6)</sup>に言及し、原子の性質と心、心所とを対比的に吟味し批判している。(3)に関しては、微細な間隔がなければ隔てられることはあり得ない(結合したものとなる)と批判している。

この中、(2)説に関してシャーキャブッディによる Vś 14 を巡るシュバグプタの原子論への批判が見られ、最も重点を置いており特徴的である。したがって、この(2)説に関するシャーキャブッディの見解は後に別個に扱うものとする。

(1)説に関し、シャーキャブッディが、世親の Vś に拠っているものは次の点である。同時に六個と結合すれば、原子は六つの部分 (aṁsatā) を有する。六個が同一の位置にあるから、原子の塊 (piṇḍa) となろう (Vś 12) というものである。この点に関し、シャーキャブッディが諸原子の結合の仕方を、一部分としてか、それとも全体としてかとディレンマを設け矛盾に導くことは、シャーンタラクシタにより MAV ad MAK 11-12 に継承されている。(3)の経量部説と見られるものを、微細な間隔がなければ諸原子が隔てられることはない(結合している)というものは、MAV ad MAK 11-12 に採用されていると思える。なおシャーキャブッディに特徴的な面は、(2)説に関して世親の言及することのないシュバグプタの原子論 (BASK 35, 46) を批判し、原子と心、心所を対比させ峻別する基準を明確に与えていることである。そこでシャーンタラクシタの MAV ad MAK 11-13<sup>7)</sup>における原子論批判を見れば、世親、ヴィニータデーヴァからの影響が見られることは無論、それにもましてシャーキャブッディによる原子論の吟味を踏襲していることに気がつく。その最大の根拠は、シャーキャブッディと同じく(2)説に関連して、シュバグプタの原子論すなわち原子が方位と支分の区別 (digbhāgabhedā, Vś 14a) を有することを多

4) cf 戸崎 (1979) pp.311-312.

5) この部分の知識論を中心とした研究に、岩田 (1981)。

6) cf V. 資料 [1] - [3]

7) cf 一郷1985 pp.126-128.

くの原子が包圍しているとする見解 (BASK 46) に言及し、具象的な原子と非具象的な心、心所とを峻別することにより批判していることである (cf 以下のⅡ後半)。そこでまず、シュバグプタの原子論と知識論の特徴を把握する必要があるだろう。

## Ⅱ. シュバグプタの原子論と有外境無形象知識論, 有外境有形象知識論

まずシャーキャブッディとシャーンタラクシタらが<sup>8)</sup>共通してシュバグプタの原子論と無形象、有形象知識論を批判的に吟味していると思える BASK の偈を示すと、BASK v.35≒TS 1971

tulyāparakṣaṇotpādād yathā nityatvavibhramaḥ /  
avicchinnasajātīyagrahane cet sthūlavibhramaḥ //

例えば、別の類似した刹那が起こる故に、常住なものであるという迷乱が起こるように、途切れることなき同類の認識がある場合、粗大であるとの迷乱が起こるのである。

BASK v.44=TSP p.672, 15-16

pratyekaṁ na cāṇūnām svātantryeṇāsti sambhavaḥ /  
ato'pi paramāṇūnām ekaikāpratibhāsanam //

諸の原子は、独立して個々に存在し得ない。したがってまた、諸原子が個々に顕現することはない。

BASK 46=MAV, MAP pp.52-53≒TSP p.678, 12-13 (≒AAA p.625, 24-25)

tataś ca digbhāgabhedavattvād iti kevalam bahubhiḥ  
parivāraṇam evoktaṁ syāt na sāvayavatvam

したがって、方位と支分の区別をもつ故にというのは、多くの [原子] が包圍していることこそをいっているに過ぎないのであって、[諸原子が] 部分を有するということではない。

さらに次の原子の無部分に関する言明がハリバドラの AAA に引用され、サンスクリットが回収され得る。

BASK 49=AAA p.625, 27-28.<sup>9)</sup>

8) シュバグプタの BASK とシャーンタラクシタ、カマラシーラの TS, TSP (ch.23), MAV, MAP との関係や、それぞれのテキストの和訳や研究は多く、参照し益を得たものは次のものである。Hattori (1960), 御子神 (1983) (1986) (1987) (1997), 一郷 (1985), 太田 (1967) (1970), 菅沼 (1981) (1985)。

9) 森山 (1984) で AAA の英訳を発表した時点で、それが BASK 49 であることは、不

tadanyāpekṣayā 'nyasya yad rūpam avadhāryate /  
tad asat tatra tattvena pārāvārādibhedavat //

A に依存して確定される B の本質は、真実として A に存在するものではない。  
此岸と彼岸の区別のように。

シュバグプタの有外境、無形象知識論は

BASK 89=TSP p.684, 15-16 (=MAV ad MAK 19)<sup>10)</sup>

katham tadgrāhakaṁ tac cet tatparicchedalakṣaṇam /  
vijñānam tena nāsaṅkā katham tat kimvad ity api //

どうして、それ（無形象知）が、それ（外界の対象）を把握するのか、というなら、知識はそれ（外界の対象）を識別する特徴を有する。したがって、どうしてどのようにそれ（無形象知）が〔対象を把握するのか〕と懸念すべきではない。

シュバグプタの有外境、有形象知識論は

BASK 87=TSP p.696, 11-12

sākārajñānapakṣe ca tannirbhāsasya vedyatā /  
tasyābbede ca saṁsādhye siddhasādhanatā bhavet //

有形象知識論において、その（外界の対象の）顕現が知らるべきものである。またそれ（外界の対象の顕現）が〔知と〕無区別であることが証明される場合、すでに証明されたものを証明することになろう。

これらから知られるシュバグプタの原子論とは、①個々の原子が顕現することはない<sup>11)</sup>（原子の集合が顕現する）。②次々の刹那に起こる故、連続しているが如く認識される粗大さというものは、迷乱である<sup>12)</sup>。この①、②はシャーキャブッディにより一多の点で吟味に耐え得ないと批判される。またシュバグプタは③方位と支分の区別を有する（Vś 14a）<sup>13)</sup>ということ（中央にある）原子を他の多くの原子が包圍していることと解釈し、部分を有すること（sāvayavatva）ではないとする。この③は、シュバグプタの BASK 46 であり、これは世親の方位と支分の区別をもつものは、単一ではあり得ない（digbhāgabhedo yasyāsti tasyaikatvaṁ na yujyate

ゝ明であったが、その後、小林 守氏から私信で教授された。

10) この BASK 89 は、Blo gsal grub mtha' の経量部章に出る。MIMAKI (1979) p.193fn (9).

11) そこで、原子の集合が批判される。cf 資料 V. [1]

12) これを批判するシャーキャブッディの見解は、本稿 III. [2]

13) TSP 678, 8-13 の訳出において、BASK 46a が Vś 14a に相当することの指摘は、一郷 (1985) p.77. この TSP 自体も、シャーキャブッディによっているものと思われる。cf 本稿 III. [3], V. 資料 [3]

Vś 14ab), すなわち〈部分をもつもの=単一にあらざるもの〉を批判するものと考えられる。それに対しシャーキャブッディは具象的なもの (mūrtatva) と具象的にあらざるもの (amūrtatva) を峻別し、具象的なもの (原子) が部分を持たずに存在することはあり得ないとシュバグプタの BASK 46 を再批判していると考えられる。なぜならシャーキャブッディの具象的なものと非具象的なものとを峻別する見地を受けてシャーントラクシタ、カマラシーラが、Vś 14ab を引き BASK 46 を批判する (cf TSP pp.677-679 ad TS 1989-1991) 情勢がそれを知らしめ補強する。また、シュバグプタの有外境無形象知識論、有外境有形象知識論もシャーントラクシタ、カマラシーラにより批判される。

### Ⅲ. シャーキャブッディの原子論批判から唯識思想への展開 及びその後の影響

以下に示す [1]–[6] は、V. 資料として訳出したシャーキャブッディの PVTŚ のシノプシスであり、訳中の番号に対応する。

#### [1] 三種の原子論の提示と論破の新方式

先にも見た通りシャーキャブッディは、世親の方法を踏襲し、三種の原子論を提示し、それらを批判することにより外界の対象を否定するが、第(2)説として有部の原子論に加えシュバグプタの原子論、BASK 35 (=TS1971) を取り上げていると思われる。なぜなら、

[同類の原子によって] 包圍され近接しているが、異類な (原子) によって隔てられている原子は間隔 (bar, antara) を有するに他ならない。また粗大な (sthūla) 形象としての顕現である堅固な積集というものは迷乱である。

と言及して、これは〈原子は間隔を有する〉という有部説に加え、〈諸原子を粗大なものであると認識することは迷乱である〉と表明する BASK 35 を指示すると考えられるからである。この BASK 35 を始めとするシュバグプタの原子論を主に批判するシャーキャブッディの原子論批判は、世親にない新方式と考えられ、特にこの方式が、シャーントラクシタ、カマラシーラ、ハリバドラらの TS, TSP, MAK, MAV, MAP, AAA などにおける原子論批判のモデルとなり直接、間接的に踏襲されたものと思われる。なお、第(2)説に関し MAV ad MAK 11-12 では、BASK 46 を取り上げている。

## [2] シュバグプタの BASK 35 (≒TS1971) への批判

諸原子に基づく粗大な形象の顕現を迷乱であるとする見解（シュバグプタの BASK 35）が反論として取り上げられ、それに対しシャーキャブッディは、直接知覚されると想定されているもの（外界の諸原子）にとって 粗大な形象は一と多という点で吟味に耐え得ない、と退けている。これは次の通り解釈されよう。単一な原子に粗大さはなく知覚され得ないから、知覚されるには粗大な形象が必要であるが<sup>14)</sup>、部分をもたず結合しない外界の多なる原子は多であるに過ぎず粗大な形象を形成するものではない。したがって粗大な形象は多でもない。この意味で一と多という点で吟味に耐え得ないのである。他方、自己認識としての粗大な形象は部分をもたず、知の単一性と矛盾しない。なお、この一と多という点で吟味に耐え得ない、という論拠も、世親の Vś 11 を踏まえていよう。

なお、カマラシーラも、多なる原子は粗大な形象を把握する直接知覚と考えられる知に顕現しないことを次の能遍の無知覚 (vyāpakānupalabdhi) 因により論じる。

自己の形象を具え直接知覚と考えられる知に顕現しないものは、直接知覚として理解してはならない。例えば、空中の蓮華のように。(遍充)

多にして具象的な原子は、粗大な形象 (sthūlakāra) を把握している直接知覚と考えられる知に顕現しない。(論理的根拠)

[多にして具象的な原子は直接知覚として理解してはならない。(結論)]

(TSP ad TS 1966-1968, p.672, 8-10)

これは、自己認識としての単一にして粗大な形象は直接知覚として認められるが、多にして具象的な原子からなるものとしての粗大な形象は認められないことを表し、シャーキャブッディと同趣旨である。シュバグプタが BASK 35 で粗大さは迷乱であると表明することをカマラシーラは否定する。「刹那滅がプラマーナによって証明されるから常住性の理解が迷乱であるように、[相対否定として] 原子がプラマーナによって証明される場合に (粗大さの) 迷乱が確定される。(TSP pp.673, 23-674, 8)」いまはそうではないから、シュバグプタは粗大さを迷乱と確定し得ない。

## [3] シュバグプタの BASK 46 への批判

外界の原子による粗大な形象は一と多という点で吟味に耐え得ない、という立証因に疑惑があるとする反論に対して、シャーキャブッディは、シュバグプタが BASK 46 で方位と支分の区別がある (digbhāgabhedā, Vś 14a) ということ、多くの原

14) カマラシーラも、粗大な形象を明瞭に顕現するもの (spaṣṭapratibhāsana, TSP p.674, 7) と認めている。



子によって包圍 (parivāraṇa) されていることに他ならず、原子に部分がある (sāvayavatva) というのではないと解釈することを念頭において批判的吟味を施していると考えられる。シャーキャブッディは、まず方位と支分の区別をもつものは、単一ではあり得ない (Vś 14ab) という世親の見解を批判的吟味の指針として活用する。すなわち

部分を有するもの＝単一にあらざるもの

部分をもたないもの＝単一なもの

この世親の規定から、さらにシャーキャブッディは、原子を具象的なもの (mūrtatva) とし、具象的なものは方位と支分の区別を持つ、すなわち部分を有する (sāvayavatva) が、知すなわち心、心所 (cittacaitta) は具象的なものではなく (amūrtatva)、方位と支分の区別を持たない、すなわち部分をもたないと、物質である原子と非物質なる知とを峻別し、BASK 46 を批判的に吟味していると考えられる。このシャーキャブッディによる具象的であるか否かを基準とする物質的なものと知識との峻別は、

原子＝具象 (物質) 的なもの (mūrtatva) ＝方位と支分の区別を有するもの＝  
部分を有するもの (sāvayavatva) ＝単一にあらざるもの

知 (心、心所) ＝非具象 (非物質) 的なもの (amūrtatva) ＝方位と支分の区別  
をもたないもの＝部分をもたないもの＝単一なもの

この物質である原子と非物質な知 (心、心所) とを峻別することを新たに設けシャーキャブッディは、世親の Vś 14 を批判するシュバグプタの BASK 46 を再批判していると見られる。すなわち、原子が方位と支分の区別を欠き、単一であるなら知と同様、具象的なものではあり得ない。他方、原子が方位と支分を具え、部分を有し、多であるなら、原子自体の単一性と矛盾する。したがって、原子は一と多という点で吟味に耐え得ない故に (gcig dañ du mas dpyad mi bzod pa ñid kyī phyir PVTŚ P250b3, D203a6)、という立証因は正しい因であり、原子はいかにしても成立しない。このことにより外界の対象は否定され、自己認識が成立する<sup>15)</sup>。争点は原子と知とを同様に無部分とするシュバグプタの見解に対し、知のみを無部分とし、具象的にして部分を有する原子とを峻別するシャーキャブッディとの見解の相違にある。

このシャーキャブッディのシュバグプタ批判が、そのままシャーントラクシタ、カ

15) カマラシーラも原子論を退ける離一多性 (ekānekarahitvatva) 因が、不成 (asiddha) ではないと論じ、外界の所取を否定することにより、それによって設けられる知が能取であることも否定し、唯識 (vijñaptimātrata) へと導いている。TSP ad TS 1997 p.681, 16-22.

マラシーラの TSP ad TS 1989-1991 における離一多性を立証因とし、原子論を論破する推論及び関連する論議に活用されていると思われる<sup>16)</sup>。なぜなら、カマラシーラはそこで三種の原子論を挙げ<sup>17)</sup>、BASK 46 を引用し<sup>18)</sup>、Vś 14ab<sup>19)</sup> を拠り所として心、心所との対比の上から具象的なもの（原子）との区分を鮮明にし BASK 46 を批判し、さらにシャーキャブッディの空間的視点からの原子と知との峻別法に加え、時間の観点からあらゆる存在にとって時間的に設けられた連続には (kālakṛte paurvāparye sati) 部分はないが、空間的に設けられた（具象的な原子の）連続 (deśakṛtaṃ paurvāparyam) というものは必ず部分を有す (sāvayavatva) と規定する<sup>20)</sup>。これは、連続した二刹那の観点から知識と同様に、原子に関しても無部分を主張し、原子の实在を唱えるシュバグプタの BASK 51 を批判するものであろう。

以上の [1] - [3] を見るならば、シャーンタラクシタ、カマラシーラさらにハリバドラは、シャーキャブッディによるシュバグプタの原子論への批判を踏襲し、離一多性因による原子論批判を展開し自己認識の理論へと導く指針としたと思われる。このことは、TS 第23章「外界の対象の考察」及びカマラシーラの TSP ad TS 1966-1976, 1988-1997 及び AAA pp.624, 13-626, 7 を見れば、なお一層明らかである。換言すれば、TS 23章前半部分における原子論批判はシャーキャブッディによるシュバグプタ等の原子論批判の活用から構成されたと見られる。このことは、MA, MAV, MAP に関してもいえよう。その意味では、TS, MA, MAV での原子論批判はシャーンタラクシタの独創ではないであろう。したがって、彼らの活躍年代としては、世親→ダルマキールティ→シュバグプタ→シャーキャブッディ→シャーンタラクシタ→カマラシーラ→ハリバドラの順になると思われる。

#### [4] 有外境無形象知識論批判

シャーキャブッディは、外界の対象を認め、知は無形象であるが知は外界の対象を識別し得る、というシュバグプタの BASK 89 に表明されるような無形象知識論を論難している。それは、青や黄色と識別して認識し得るためには、知には対象との類

16) 一と多の自性を離れたもの (ekānekasvabhāvarahita) は、無存在であると表現するのが道理に適っている。例えば、空中に咲く蓮華のように。(遍充)

他学派によって考えられている諸原子は、一と多の自性を離れたものである。(論理的根拠)

[他学派によって考えられている諸原子は、無存在である。(結論)]

以上の [推論] は、同一性の因 (svabhāvahetu) に拠るものである。

(TSP p.677, 14-16)

17) TSP p.677, 20-23.

18) TSP p.678, 12-13, cf 本稿Ⅱ. BASK 46.

19) TSP p.679, 23.

20) TSP p.679, 16-24.

似性 (arthasārūpya) が認められなくてはならないというデーヴェンドラブッディの見解を受け、有形象知識論によって無形象知識論の不備を指摘する。これを受け、シャーンタラクシタは、MAV ad MAK 19で、BASK 89に言及し無形象知は対象を識別し得るものではないと指摘し、有形象知識論へ導いている。また、同様にカマラシーラも TSP ad TS 2008-2009において、BASK 89を引用し<sup>21)</sup>、無形象知は対象を識別 (pariccheda) し得ないことを、対象との類似性 (tadrūpya) による有形象知識論から唯識 (vijñaptimātratā, TSP p.684, 23) へと導くことにより論じている。これは、シャーキャブッディによるシュバグプタの原子論批判、及び無形象知識論批判から、さらには有形象知識論、唯識へと導く方法がシャーンタラクシタ、カマラシーラへと継承されたものと思われる。

#### [5] 有外境有形象知識論批判

シャーキャブッディによれば、外界の対象との類似性を根拠とする有形象知識論においては、原子からなる外界の対象 (色) と、それと類似した映像とは、設定するものと設定されるものの関係にあるが、その両者が真実として知覚されることはない。このシャーキャブッディの批判する有形象知識論が、シュバグプタの見解であると特定し得るわけではないが、シュバグプタは BASK 87で、有外境有形象知識論に立ち対象の顕現と知との無区別 (abheda) を表明している。それは、TSP ad TS 2033-2034に引用され<sup>22)</sup>、シャーンタラクシタは、TS 2035-37で有外境有形象知識論を批判している。すなわち、知と形象 (ākāra) は別ではない (avyatirikatva) から、多様な形象はあり得なくなるか、知が多なるものとなるかであり、知と形象の同一性 (ekatva) があり得なくなると論難する。なお、シャーンタラクシタ、カマラシーラによる有外境有形象知識論批判における、知と形象との無区別に関し双方における一、多の不一致を問題にすることは、シャーキャブッディの提唱する形象真実論に対する批判の際 (MAK 46-49) にも適用され、また有外境無形象知識論批判において、知と対象との類似性を問題とすることは、形象虚偽論批判の際 (MAK 52-60) に、因果関係 (tadutpatti) や同一性 (tādātmya) という必然関係を問う点に活かされている<sup>23)</sup>。

[6] シャーキャブッディの唯識思想は、所取、能取の形象を離れた無二知としての自己認識の理論である (PVTŚ P251a6-b8)。この理論も、知は部分をもたず、単

21) cf 本稿Ⅱ

22) cf 本稿Ⅱ

23) cf 森山 (1992), (1993)

一であるということが根拠になっている。この無二知としての自己認識には、因果関係 (tadutpatti) や同一性 (tādātmya) という必然関係もないとカマラシーラにより *Madhyamakāloka* (MāI) で批判される<sup>24)</sup>。さらにシャーキャブッディは、PVIII 220-222<sup>25)</sup>を受け形象眞実論と呼ばれる唯識説を表明する。すなわち〈楽などのように青なども自ら知を自性とし、知は多なるものを同時に把握する (PVT (Ś) P255b4-5)〉<sup>26)</sup>と解釈し、知における形象は多様であっても単一であると、その根拠を外界の対象における多は、一部を覆い他の部分を認識し得るが、具象的ではない知においては、一部を覆い他の部分を認識することはあり得ないから、すなわち部分をもたない故、知における多は単一であり得ると主張する。これも知は具象的でないから外界の対象と峻別されることを根拠にしている (cf PVTŚ P256b8-257a2)。すなわちシャーキャブッディによれば知のみが一多の点で吟味に耐え得るわけである。他方、シャーンタラクシタ、カマラシーラは唯識思想自体の吟味においては、この峻別の有効性を認めず、多である限り知といえども拮がりを有し無部分ではあり得ず、原子の場合と同じ欠陥を免れ得ないと、MAK 51, 及びそれに関するMAPで論難する。同様にハリバドラも、AAAで論難している<sup>27)</sup>。このシャーキャブッディの無二知としての自己認識論への批判から、彼らはさらに中観思想へと導くのである。

以上の [1] - [6] 全体を考慮すれば、諸哲学の段階的克服の次第が読み取れ、すなわち、シャーキャブッディは、シュバグプタの主張する原子論を批判することによる外界実在論の論破から有外境無形象知識論、有外境有形象知識論を批判し、無二知としての自己認識の理論へと導いている。この展開の仕方は、シャーキャブッディに始まりシャーンタラクシタらへと引き継がれる。

以上の点からして、シャーンタラクシタは、シャーキャブッディによる〈一と多の点で吟味に耐ええないことを根拠〉とする原子論批判、特にシュバグプタの原子論に対する批判さらには同じシュバグプタの有外境無形象知識論、有外境有形象知識論に対する批判を踏襲し離一多性を立証因とする無自性論証及び諸哲学の吟味と超越の次第を考案したものと思われる。

24) cf 森山 (1987) pp.42-47.

25) cf 戸崎 (1979) pp.317-318.

26) cf 岩田 (1981) p.156. MAV p.132, AAA p.627, 2-4. 森山 (1984) pp.49-50 fn. (206).

27) AAA pp.627, 4-628, 6. 森山 (1984) pp.50-54. 本稿 fn 39).

#### IV. 後期中観派によるシャーキャブッディの唯識説批判

ハリバドらは、シャーキャブッディの唯識思想、すなわち自己認識の理論を引用し批判している。それは、シャーンタラクシタの MAV ad MAK 49 及びそれに関するカマラシーラの MAP によるものであるが、サンスクリットの得られる AAA を基に吟味する。そこに引用されるシャーキャブッディの自己認識の理論とは、

楽 (sukha) などのように、青などの形象は知覚を本質 (anubhavātmaka) とするもの (自己認識) に他ならない。したがって、上述の単一なものに多様であること (citraṭva) は認められないから、[多なる形象と単一な知との間における矛盾を] 指摘する批判は当たらないと考えて、同種 (samānājatīya) の多なる知識が異種の知識 (vijātiyajñāna) の如くに同時に (sakt) 生起すると [シャーキャブッディは] いう。(AAA p.627, 2-4., MAV p.132, 44-6.)

このシャーキャブッディの〈同種の多なる知が同時に生起する〉という見解はシャーンタラクシタらの批判的となった。なぜなら、それは知が部分をもたず単一であるという、知の特殊性に矛盾するからである。この点をシャーンタラクシタらは、多なる知ということは、原子の場合すなわち(1)諸原子が結合する場合、(2)他の諸原子に包囲されている場合、(3)諸原子が間隔なく積集している場合の三種の原子論の場合と同じ欠陥を有することになると批判する。原子批判において間隔なくということは、結合されることと異ならないと指摘されるように (cf MAV p.56, 1), (1)説は(3)説に吸収されるとすれば、(2)説、(3)説の原子論の場合の欠陥と〈知は多である〉ということをそれぞれに対応させて批判する、すなわちシャーンタラクシタの MAV ad MAK 49 は、シャーキャブッディの自己認識批判ということになる。すなわち、中央にあると想定される知識は、包囲された原子の場合すなわち(2)説の場合と同様、全体として他の原子と対面するなら、多数の諸原子は一なる塊に過ぎず、また一部分で他の原子と対面するなら、原子は部分を有するという矛盾となる。それと同様、多なる知というのは矛盾するといふのである。それに対し、シャーキャブッディの反論が想定される。すなわち、諸の知識は具象的でないもの (amūrtatva) であるから諸の知が中央に位置するということはない (AAA p.627, 13-14)。それに対し、中観派は諸の知が空間的存在でないにもかかわらず、多である限り諸原子と同様、空間的拡がりをもって存在していること (deśavitānāsthāna) を免れ得ない (AAA p.627, 14-17) と論難する。これは「多」ということを「空間的拡がり」と解釈し、それ故、部分を有することになり、知は単一ではあり得ないと指摘するもの

である。それに対し、さらにシャーキャブッディの反論が想定されている。

諸原子は、具象的なもの (mūrta) であり、知識は具象的なものではない (amūrta)。この場合どうして、これ (知) がそれ (諸原子) と同じ誤謬を犯すことになるのか (AAA p.627, 22-23=MAP p.141, 1-2)。

これこそ正しくシャーキャブッディの物質である原子とそうではない知識とを峻別する根拠であり、多なる知を主張し得る根拠なのである。それに対し、中観派は諸原子が間隔を置かずに、という(3)説を引き合いに出し、間隔を置かずに顕現している青などを、ある者(経量部)は原子を本質とする (paramāṇvātmaka) とし、他の者(シャーキャブッディ)は、知識を本質とする (saṁvidrūpa) と考える。これは名称のみ (nāmamātra) の区別に過ぎない (AAA p.627, 23-28)<sup>28)</sup>。すなわち、空間的に間隔を置かずに存在している諸原子と多なる知識とは、同じ欠陥を共有するものに他ならないと論難する。したがって、以上のハリバドラの言及に先行して、知識のもつ多様性は原子の場合と同じ欠陥をもつことになると批判するシャーンタラクシタの MAK 49 は、シャーキャブッディの知識論を批判するものである。

シャーキャブッディは、具象的であるか否かということにより原子と知識とを峻別し、原子に向けられた批判は知識には及ばないが、外界の対象(諸原子)は、具象的なもの(物質)の持つ制約すなわち方位と支分を有し、単一ではありえない。他方、知識はその制約下になく青などの形象は黄色などと分割して認識され得ず、共に認識され、それ故、部分を持つものではなく、多様性を有していても単一であり得る、として知を外界の対象(諸原子)の制約を超えたものとして扱うのであるが、中観派は、シャーキャブッディの知識のみを特別扱いする見解を許さず、知といえども拡がりを持つ限り原子の場合と同様な欠陥をもつこととなり、外界の対象(諸原子)のもつ制約を免れ得ないとする。知といえども、究極的に例外的な特殊性を認めることは、中観派にとり、自性 (svabhāva) を認めることに他ならず、それは否定されるものとなる。したがって唯識思想も段階的な自己否定の上に哲学の深化と進展を目指す修道論上に組み込まれ、それ故それを批判的に克服し、さらに中観思想へと導く体系をシャーンタラクシタらの中観派は構築している。その前段階の唯識思想へと導く体系はシャーキャブッディによって示されたものである。

---

28) cf MAV p.140, 1-6.

## 結論

1. 世親の Vś における三種の原子論を論難することによる外界の対象の非実在の証明から唯識思想へと導く方法は、その後、シャーキャブッディ、シャーンタラクシタ、カマラシーラへと継承された。シャーキャブッディは自己認識される粗大な形象を認め、それと迷乱としての原子による粗大な形象を対比させ BASK 35 を批判し、さらに世親の Vś 14ab を批判するシュバグプタの原子論 BASK 46 を Vś 14ab を拠り所として心、心所と対比することにより批判的に検証し〈部分を有する具象的な原子と無部分であり非具象的な心、心所とを明確に峻別する基準〉を与え、さらに〈一多の点で吟味に耐え得ない〉という視点から BASK 46 を再批判している。このシャーキャブッディによるシュバグプタの原子論に対する批判が、その後シャーンタラクシタ、カマラシーラ、ハリバドラへと継承された。それが、TS, TSP, MAK, MAV, MAP, AAA など展開される。特に空間的存在（原子）は無部分ではあり得ないことを根拠としてカマラシーラの TSP では BASK 51 を、またハリバドラの AAA では BASK 49 を批判している。したがって、彼らの活躍年代の順序としては、世親→ダルマキールティ→シュバグプタ→シャーキャブッディ→シャーンタラクシタ→カマラシーラ→ハリバドラを考え得る。またシャーキャブッディ (c. 660-720) に先行するシュバグプタの生存年代は、640-700年頃と考えられよう。〈離一多性〉を根拠とする原子論批判のみならず、シャーキャブッディはシュバグプタの有外境無形象知識論も批判し、さらに外界の対象と類似した形象が知に置かれるとする有形象知識論を論難し、自己認識の理論を展開する。この〈段階的な諸哲学の批判的吟味と超越の方法〉が、シャーンタラクシタにより踏襲され、TS 第二十三章「外界の対象の考察」におけるシュバグプタの原子論や有外境無形象知識論、有外境有形象知識論の批判的考察の指針となった。さらに MAK, MAV またカマラシーラの Māi において〈離一多性〉を立証因とする無自性論証、中観思想を展開する方法として採用された。他方、シャーキャブッディによる、知は青などの形象を同時に把握し多であっても、具象的な原子の制約は受けけないという自己認識の理論は、シャーンタラクシタらにより、その多なる知は、原子の場合と同じく多である限り、部分を有することを回避し得ず、したがって単一ではあり得ないと批判される。このシャーンタラクシタによる唯識説への論難が、さらに中観思想へと導くものになる。

2. 勝論派、有部、シュバグプタ、経量部などが、物質を最小単位である原子 (paramāṇu) という視点から考察すること自体は、それを批判する唯識派や中観派

よりも古典的とはいえ科学的であるかも知れない。また日中、我々の肉眼では見えない星も、天空に存在し、また電子などの不可視なものも存在する。さらに電子顕微鏡などによれば、肉眼ではとうてい見えないものも認識される。他方、肉眼などによる直接的な知覚によって把握されたものや、自己の知識に基づくものだけを実在と考える唯識派や、さらにそれさえも究極的には非実在と見るシャーンタラクシタらの中観派の思考法は一面、非科学的とも写ろうが、見えないものも存在するという事を知ること自体も知識の問題であると知に重きを置く唯識派やシャーンタラクシタらは、知識を離れ独立した原子やその集合からなる物質を究極的な実在とは見ない。唯識派は、自然界（物質）の批判的吟味を原子という点から施し、一多の点で吟味に耐え得ない故、如何なる原子論も成立せず、自然界は知識に顕現したものであり、もはや物質ともいえず、知識のみ（唯識）の対象として自然界は存在すると考える。このことのもつ意味は、自然界は人間にとっては、仮に科学的解明の対象としてあるとしても、昆虫や動物にとっては、別の鋭い感覚で把握されるものであろうから、それぞれの個体にとって自然界の把握は一様ではない、またその持つ意味となるとなれば一義的に云々し得ないということである。人間にとっての自然界の把握と昆虫や動物のそれとのいずれが真理であるか、それは言い得ないし、それを決めようとするれば、一方的に決めつけているだけのこと（自性）であり、実は愚かしいことに違いない。したがって、一方のみが自然界の実体を主張し得るものでもない。こうなれば、我々人間の把握した限りの自然界（物質）も我々の認識や知識も実体なき「空」なるものと気づかざるを得ず、吟味しない限り素晴らしい世俗的なものに過ぎないということになる。これが、唯識から中観思想への展開である。インド中観思想史とは、このことの解明への営みであると考えられる。結局のところ科学による自然の解明がいかに的確に行われようとも、自然界そのものの営み自体が変わるわけでもなく、動物や昆虫の自然界への取り組みも本質的には変わることもなからう。人間の営みが、一定の真理を把握せしめるものであるとしても、それは人間の営みでしかないことを銘記すべきであろう。それを越えようとする、すなわち科学的解明への過信やクローン人間の創出などということを目指すならば、むしろ自滅への道を歩むことになると思われる。世親、ダルマキールティ、シャーンタラクシタ、カマラシーラらの刹那滅の思想とは次のものである。

滅無因一滅の原因は他にあるのではない。物質も精神も滅びの原因は元来自らにある。



V. 資料シャーキャブッディの *Pramāṇavārttika-ṭīkā* (PVTŚ) 〈P249b4-251a7, D202b2-203b7〉 〈P251b5-8, D204a4-6〉 和訳研究

[1]

〈個々の原子に関して、粗大な顕現の形象をもった知識が存在するのではない。(多数の原子が) 集合する (tshogs pa) としても、それに単一な自性が、存在するのではないなら<sup>29)</sup>、どうして [単一な] 知識が (原子と) 類似するもの ('dra ba) となろうか。(PVP P226a3-4)〉 [原子が] 別の原子と融合 ('dres) するとしても、諸原子の原子としての [部分をもたず単一という] 自性は崩れない<sup>30)</sup>。集合 (tshogs pa) するとしても、それらが原子の自性そのもの [無部分にして単一] であるなら、粗大な形象をもった知にとって、原子 [の集合] は対象ではない (顕現しない)<sup>31)</sup>。そうであるなら、無迷乱な心 (直接知覚) によって [原子の集合は] 確定され得ない。別の (粗大な) 形象をもった知によって、別の (集合した原子の) 形象が把握されることはないからである。さもなければ、過大適用の過失となろう。無知なる者 (mi mkhas pa) [シュバグプタ] 達は、(P249b6) 粗大な (sthūla) 形象は外と内にあるのではなく、それ (粗大な形象) は知識の対象ではなく [迷乱で] あって、[他方] 極めて近接していて、空間的に途切れていない (ma chad pa, avicchinna) 他の原子によって包囲されている原子が、直接知覚の対象である [と考える] (⇐ BASK 35, 46)<sup>32)</sup>。(1) [諸原子が相互に結合するというカナダの見解の場合] それらの原子も相互に結合すること ('dres pa, samyoga) はない。結合することは、二者としても妥当しないからである。一つの場所で [他の原子と] 結合 ('du, samyoga) するなら部分を有する (単一にあらざる) ことになり、全体として [結合する] なら原子の [-] 塊 (piṇḍa) に過ぎない (多にあらざる) ことになろう<sup>33)</sup>。したがって、(2) [同類の原子によって] 包囲され近接しているが、異類な (原子) によって隔てられている原子は、間隔 (bar, antara) を有するに他ならない。また (P250a1) 粗大な (sthūla) 形象としての顕現である堅固な積集 ('dus pa) というものは、迷乱である [というシュバグプタの見解 (⇐ BASK 35)]<sup>34)</sup>。(3) [諸原子が [間隔なく

29) cf PV III (321), PVP D220a2-4., 戸崎 (1985) p.6. fn (17)., BASK 35, 44. MAV p.50, 1-3.

30) cf TS 1969

31) cf TS 1967, TSP p.672, 8-10.

32) cf TSP p.673, 13-16 ad TS 1971, AAA p.625, 24-25, BASK 35, 46.

33) cf Vś 12, MAV p.54, 1-7., AAA p.624, 16-26.

34) cf BASK 35⇐TS 1971., MAP p.51, 15-16., AAA pp.624, 27-626, 7.

積集しているという経量部の見解の場合]] 微細な間隔 (bar chad, antara) によって隔てられることはあり得ない (結合していることになる) からである。そう以上のように語る対論者 (カナダやシュバグプタや経量部) は愚かな知恵をもつものである。自らの言葉そのものによって自らの言葉を嘲笑的 (viḍambya) にするようなものであって、それは迷乱である。

[2]

[反論]

原子 (D202b7) を把握すると想定されている知において、粗大な形象の (P250a3) 顕現というものが迷乱である<sup>35)</sup> (⇐ BASK 35)

[答論]

どうしてその (粗大な) 形象を持った (有形象) 知が原子を対象としていようか。別の [粗大な] 形象をもてる知が別の [集合した原子の] 形象を対象とするのではない。過大適用の過失となるからと述べ終わっている。原子の形象をもった知が、いかなる賢者 (tshu rol ma mthoñ ba) によっても正しく知られることはない。したがって、原子は直接知覚の対象ではないし、推理の対象でもない<sup>36)</sup>。その場合、結果としての [原子の形象を有するとする] 知を排除する [一と多という点で吟味に耐え得ない故にという] 立証因によって考察しなくては (D203a2) ならない。他の人々 (シュバグプタら) がそれ (粗大な形象という迷乱) も内なる習気によって設けられると主張する (⇐ BASK 35), そうであるなら、それ (習気によって設けられるということ) もその (粗大な形象を証明する) 立証因では (P250a5) ない。そうであると認めたとしても (習気によって粗大な形象が起こるとしても), [汝, シュバグプタらによって] 直接知覚であると想定されているもの (外界の諸原子) にとって粗大な形象は一と多という点で吟味に耐え得ない<sup>37)</sup>から, [粗大な形象は] 勝義として無であることがより勝っている。前述の原子を自性とする形象を全く知覚しない (atyantaparokṣa) もの (自己認識としての知) は, まず断じ得ないし, それ (自己認識としての知) を拒斥する検証 (bādhakapramāṇa) は機能しない。それ (自己認識としての知) は, 部分をもたないもの (cha med pa, niraṃśa) に他ならない

35) cf BASK 35., TSP p.673, 15-16 ad TS 1971.

36) cf TSP p.677, 9-10.

37) cf 戸崎 (1985) p.14, fn (17) PVP P258a2-4. 個々の原子を自体とするものを対象とするのか, あるいは集合した自性のもを [知に] 置くのか, であるなら, その場合, まず [個々の] 原子を自体とするものではない。というのは, 知に粗大な形象として顕現するものも, 個々の微細なものにあるのではなく, そうならば, 自性によって原子は類似性をもうけるものではない。[原子の] 諸集合にも単一な本質はない。一と多は矛盾するからである。

故、単一な自性のものだからである。

[3]

[反論]

それ（自己認識としての知）を証明するもの（sādhana）も存在しないから、まさしくそれ故に、（一と多という点で吟味に耐え得ないから、という立証因は）疑惑（saṃśaya）のあるもの（不成因）となろう<sup>38)</sup>。そうであれば（一と多という点で吟味に耐え得ないからという立証因が疑わしいなら）、また疑いなくあらゆる場合に諸法は無我であるといえなくなろう。

[答論] (ad BASK 46)

その（詰問）に答え（P250b1）なくてはならない。そう詰問する者によっても、必ず原子は具象的なもの（*lus can nīd, mūrtatva*）であると認められなくてはならない。具象的でないもの（*amūrtatva*） [=知] が原子であることは妥当しないから。そうでなければ、（D203a5） [具象的でない] 心、心所に関しても原子の性質があると何故、考えないであろうか<sup>39)</sup>。 [原子が] 具象的であるなら、必ず方位（*diś*）と支分（*bhāga*）の区別あるものとなろう。 方位と支分の区別（*digbhāgabhedā*）<sup>40)</sup>を欠いているもの（単一な原子）も、知識と同様に具象的であることは妥当しない<sup>41)</sup>。 方位と支分の区別がある（D203a6）のなら、部分を具えたもの（*sāvayavatva*）である（したがって多となり原子の単一性と矛盾する）（⇔ BASK 46）<sup>42)</sup>。それ故に、[具象的なものである原子は] 一と多の点で吟味に耐え得ないから、 [原子からなるとされる] 粗大なもの（*sthūla*）のように原子に関しても拒斥があろう（P250b4）。この（原子を拒斥する）ことも、偉大な師、世親（*Vasubandhu*）などが見事に [『唯識二十論』で原子の实在論を] 論破し去っている。それ故に、外界の対象は存在しない。決定するものが内にあり [PVIII 212a]、云々ということによって、まず [知の] 自性を分析して説いている。別のこの部分 [PVIII 212ab] というのは、内に顕現す

38) cf TSP ad TS 1988, p.677, 12-13. そこで対論者は、一と多の自性を欠いているから（*ekānesvabhāvarahitvatva*）、という立証因は疑惑があり不成（*sandigdhasiddhatā*）であるという。

39) cf TSP ad TS 1989, p.679, 17-18. もし、部分（*sāvayavatva*）が存在していない場合でも、空間的に設けられた前後が存在するなら、心、心所にも [空間的に設けられた前後] 存在しよう。 [原子と心、心所とに] 区別がないからと [シャーキャブッディによって] いわれる。AAA p.627, 13-28. 本稿 27)

40) cf Vś 14a.

41) cf TSP p.678, 14-16 ad TS 1989-1991.

42) 世親の Vś 14ab を批判するシュバグプタの BASK 46 における方位と支分の区別があっても、原子は無部分という見解を再批判している。

る能取の形象とは別な、青や黄色などである。凡夫の語るところは、迷乱そのものにおいて、そう顕現するからである。菩薩 (D203b1) は諸法無我を悟ることによって、無二なる自己認識 (svasamvedana) に過ぎないことを悟るのである。

[4]

内と外に顕現するこの形象という点でも、外界の対象は存在しても存在しなくても妥当する。知は二なる自性を有する。そうであれば、外界の対象が存在するとしても、知は形象を有すると承認されなくてはならない。無形象 [なる知] によっては、[対象が] 把握され得ないからである (⇔ BASK 89)。(P250b8) 外界の対象は存在しなくとも、知自体が、そういうふうな (対象を把握するものとして) 生起する、そうであれば明瞭に二なる自性を有する。しかしながら、二なる自性を有するその知も、真実ではなく迷乱によって確定されるのである。執着のままに言語習慣において [二は] 存在であると確定されるからである。そうでなければ、どうして単一な知に二なる自性が真実となろうか [知は無二である]。そのこと (無二知) を述べる (P251a2) ために、単一な知に云々 (勝義として二なる形象が存在することは不合理である) と (デーヴェンドラブッディが)<sup>43)</sup> 述べているのである。外界の対象が存在するとしても、知は二なる自性を有すると (D shes によって読む) 述べること (D203b4) は成立するから、[知は] 無形象であると主張する人の外界の対象に対する執着に対して、もしも、云々と (デーヴェンドラブッディが)<sup>44)</sup> 述べる場合、知に対象の形象がないとして、知覚の存在だけからこれにとってのこの知である (PVP P226a7-8) というのは、所取 (外界の対象) を認めることによって、青と黄色が、これにとってのこの知であるという [識別をなすこと] である<sup>45)</sup>。[そうであるなら、外界の対象が存在するとして、知が無形象 (有外境無形象知識論) なら、青と黄色の識別ができないので、知には対象との類似性 (arthasārūpya) が認められなくてはならない (PVP P226a8)。したがって、知は有形象である。有外境有形象知識論]

43) PVP P226a6-7.

44) PVP P226a7.

45) これは BASK 89 の〈外界の対象が存在し、知は無形象であるが、対象を識別し得る〉というシュバグプタの無形象知識論を想定し得よう、それに対しシャーキャブッディはデーヴェンドラブッディの見解を受け、知は対象との類似性を有することから対象を識別し得るという有形象知識論によりシュバグプタの無形象知識論を批判する。このシャーキャブッディの見解を受けシャーントラクシタは、MAV ad MAK 19 でシュバグプタの無形象知識論 (BASK 89) を批判し、同様にカマラシーラも TSP ad TS 2008-2009 で、シュバグプタの無形象知識論 (BASK 89) を批判し有形象知識論から唯識 (vijñaptimātratā) へと導く。

[5]

それ(対象の形象)も(P251a4),内に属するものなら,類似していて単一な[知における形象と]別な[外界の対象]が存在するのではない(PVP P226a8)ということに関して,顕現した形象であって,言及された通りの形象が内に属するものであって知識の自体としてあるなら,ということである。別なものとは,それ(知における形象)とは別なもの(外界の対象)ということである。類似性を設けることは,知に映像(pratibimba)を置くことである。[原子からなる]色と[色に]類似した映像すなわち設定するものと設定されるものの二が真実として知覚されることはないからである(原子からなる外界の対象と知における映像とは真に類似しているとはいえない。したがって,外界の対象は存在せず唯識である)。その場合,以下の通りとなろう。

[6]

[反論]

もし,単一な(部分をもたない)知に二なる形象が真実としてあることは矛盾であるなら,そうであれば,その二なる形象とは別な何が真実なものとなろうか。

[答論]

それ故,知は単一な自体のもの(無部分)である云々(PVP P226b2)といわれる。(P251a7, D203b7) -----

〈P251b5-8, D204a4-6〉

かえって,知とは別な(外界に存在する)如くに青などとして顕現しているものは,一と多という点で吟味に耐え得ないから,真実ではない。したがって,まず(P2516)勝義として区別される知識にとっての所取は存在しない。それが無であるから,それに依存して構想された概念知を本質とする,すなわちこの所取にとってのこの能取の本質であるというその能取は存在しないといわれる。主体と客体は相互に依存し合う故,構想されたものだからである(cf TSP p.681, 21-22 ad TS 1997)。

#### 参照論文

一郷正道(1985):中観莊嚴論の研究-シャーンタラクシタの思想-

岩田 孝(1981):Śākyamatiの知識論,「フィロソフィア」第69号

太田心海(1967):認識の対象に関する考察 *Tattvasamgraha, Bahirarthaparikṣā* の和訳研究(上),佐賀龍谷学会紀要第14号/(1970):認識の対象に関する考察 *Tattvasamgraha, Bahirarthaparikṣā* の和訳研究(下),佐賀龍谷学会紀要第17号

梶山雄一(1976):『唯識二十論』,大乘仏典 15世親論集/(1979):シャーンタラクシタの批判哲学,仏教の『比較思想論的研究』所収

- Shastri N. A. (1967) : *Bāhyārthasiddhikārikā*, Bulletin of Tibetology vol.4, no. 2
- 菅沼 晃 (1981) : 『撰大乘論』外境批判章訳註 (一), 勝又俊教博士古稀記念論集 大乘仏教から密教へ/ (1985) : 『撰大乘論』外境批判章訳註 (二), 壬生台舜博士頌寿記念仏教の歴史と思想
- 戸崎宏正 (1979) : 『仏教認識論の研究』上巻/ (1985) : 同下巻
- Masaaki Hattori (1960) : *Bāhyārthasiddhikārikā* of Śubhagupta, JIBS8-1.
- 神子上恵生 (1983) : シュバグプタの極微説の擁護—知識の対象の問題—, 龍谷大学佛教文化研究所紀要 第22集/ (1986) : シュバグプタの *Bāhyārthasiddhikārikā*, 龍谷大学論集第429号/ (1987) : シュバグプタの唯識説批判—認識対象 (ālambana) をめぐって—, 仏教学研究第43号/ (1977) : 唯識学派による外界対象の考察 (1) — *Tattvasaṃgraha* と *Tattvasaṃgrahapañjikā* の第23章外界対象の考察—, インド学チベット学研究第2号
- 御牧克己 (1972) : 初期唯識諸論書に於ける Sautrāntika 説, 東方学43
- Mimaki Katsumi (1979) : Le chapitre du *Blo gsal grub mtha'* sur les Sautrāntika, Zinbun: Memoirs of the Reserch Institute for Humanic Studies • Kyoto University
- 森山清徹 (1984) : The Yogācāra-mādhyamika Refutation of the Position of the Satyākāra and Alikākāra-vādins of the Yogācāra School. Part 1 A Translation of Portions of Haribhadra's *Abhisamayālamkāraḥ Prajñāpāramitāvyaḥyā* / (1985) : Kamalaśīla の唯識思想と修道論—瑜伽行中観派の唯識説の観察と超越—, 佛教大学人文学論集第19号/ (1987) : カマラシーラの無自性論証とダルマキールティの因果論, 佛教大学研究紀要通巻71号/ (1992) : 後期中観派と形象眞実論・形象虚偽論—*Sāntarakṣita*, *Prajñākaragupta*, *Kambala*—, 印佛研41-1./ (1993) : 後期中観派と形象眞実論及び形象虚偽論—形象 (ākāra) と三性説—, 印佛研42-1